探究的な学習の在り方に関する研究推進地域

連携中学校区：坂中学校区

連携地域を構成する学校

学校名	学級数	児童生徒数
坂小学校	14	359
横浜小学校	15	313
小屋浦小学校	7	64
坂中学校	13	359

（R3.11.1現在で記入）

１　指導上の課題

指導上の課題として、次の３点が挙げられる。

○坂中学校区は、これまでも町内小中学校で連携し、全体研修や研究発表会等を共催してきた。授業規律等についても共通に定めている。しかし、新しい学習指導要領で示された育てたい資質・能力を明らかにし、９年間のゴールイメージを共有化して取り組んでいくことについてはできていない。

○総合的な学習の時間は、全体計画にやるべき内容が位置付いているものの、指導がやや各学年・学級に任され過ぎている傾向があり、時には教師が主導して授業を展開していることも否めない。また、育てたい資質・能力に基づいた評価・改善や、生徒の主体的な学びを創造するものになっているのか等の組織的な議論が十分になされてなかった。

○昨年度、旧第２学年を対象に年度末に行ったアンケート調査では、「学校で、ほぼ毎日パソコンを使っている」の肯定的回答は66％である。GIGAスクール構想の実質的な初年度を迎え、ICTを活用した授業づくりを進めていかなければならない。

２　研究の概要

（１）研究テーマ及び研究のねらい

○研究テーマ

主体的に学ぶ児童生徒の育成～生活科・総合的な学習の時間におけるICTを活用した授業づくりを通して～

○研究のねらい

本町は、これまで『主体的に学ぶ児童生徒の育成』をテーマに生活科、総合的な学習の時間を中心に研究を進めてきた。しかし、資質・能力に基づき義務教育９年間のゴールの姿をイメージしないままの取組であり、また、教師が主導している授業を減らしていくことや、評価や改善についてさらなる充実が必要であると捉えている。そのため、本中学校区で系統的に育成を目指す資質・能力を明らかにし、そのゴールの姿をイメージしながら、生活科・総合的な学習の時間を中心として、児童生徒にとって必然性のある課題の解決に向かう探究的な学習の在り方について、中学校区全体で取り組んでいくことを研究のねらいとする。また、今年度から本格的に導入されたタブレット等を活用し、生徒の学びを深める授業づくりについて研修を進める。

（２）資質・能力の設定について

今年度まず行ったこととして、研究推進協議会を中心に、坂中学校区として系統的に育成を目指す資質・能力をまとめた。そして、児童生徒の発達段階（小学校、低・中・高、中学校）の４つの段階での具体的な目指す姿についても整理した。育成したい資質能力は、「チャレンジする力」「表現する力」「協力・貢献する力」である。また、それぞれについて、キーワードを設定した。各段階における具体の姿が、次の表である。

坂中学校区として系統的に育成を目指す資質・能力の具体の姿

	小学校			中学校
	低学年	中学年	高学年	
チャレンジする力 【挑戦】 【粘り強さ】 【解決力】	・課題や自分で決めたことに対して、最後までやってみようとしている。	・課題や自分で決めた目標に対して、粘り強くやり通そうとしている。	・自ら課題を見付け、取り組もうとしている。 ・粘り強くやり切ろうとしている。	・与えられた課題に対してだけではなく、自分なりに目標をもち、果敢に挑戦しようとしている。 ・決めたことは、困難に負けず、やり切っている。 ・自ら課題を見付けたり、調べたり、工夫してまとめたりしている。
表現する力 【自分】 【目的・相手・場面】 【工夫】	・自分の考えをもち、伝えることができる。	・自分の考えを、目的や相手に応じて、根拠を明確にして伝えることができる。	・自分の考えを、目的や相手、場面に応じて、工夫しながら伝えることができる。	・自分自身のことや自分の考えなどを理解してもらえるように、目的や相手、場面に応じて、内容や方法、表現の仕方などを工夫しながら伝えることができる。
協力・貢献する力 【役割】 【感謝】 【行動力】	・学校や家庭の中での役割に気付き、行動しようとしている。 ・「ありがとう」が言える。	・学校や家庭、地域の中での役割に気付き、皆と協力して行動している。 ・進んで感謝の気持ちを伝えている。	・学校や家庭、地域の中での役割を考え、皆と協力して行動している。 ・感謝の気持ちを相手に伝わるように表現している。	・学校や家庭、地域の中での役割を自覚し、皆と協力して行動している。 ・地域の発展のためには、どのようなことをすればよいかを考え、行動している。

（３）取組について

【探究的な学習の充実に向けての取組】

研究推進協議会で次のことを確認した。

①育てたい資質・能力の具体の姿に基づいた授業改善

坂中学校区として系統的に育成を目指す資質・能力の具体の姿を各教科・領域に落として、授業改善を行うことについて確認した。特に、各小中学校で生活科あるいは総合的な学習の時間について１本以上の単元開発を行うことを確認した。

②ICTの積極的な活用

今年度は、GIGAスクール構想の初年度ということもあり、各学校で積極的にタブレットを使っていくことを確認した。

③地域人材の積極的な活用

本町では、今年度からコミュニティースクールが位置付いた。このことを踏まえ、「地域」を学習フィールドとし、地域人材をこれまで以上に積極的に活用することを確認した。

【小中連携の取組】

研究推進協議会では、系統的に育成を目指す資質・能力について、何度も協議を重ねながら、また協議した内容を各学校に持ち帰りさらに教職員の意見を吸い上げる中で、９年間のゴールの姿の共有化が進んだ。

また、研究推進協議会の中に、研究推進リーダーを中心とした各小中学校の研究主任を構成員としたプロジェクトチームをつくり、生活科・総合的な学習の時間の単元開発を行った。特に、坂中学校が研究授業を行うこととし、その学習指導案検討を通して、やるべきことや目指すべきことについて協議しながら進めていった。学習指導案検討を柱にしたことで、研究主任のイメージ化が図られ、各学校の授業改善の方向性が定まったと捉える。

【資質・能力の評価】

各学校の単元開発の中で、ルーブリックを設定し、それぞれ3段階とすることとした。系統的に育成を目指す資質・能力の具体の姿を各教科・領域に落とし込み、その姿を原則としてⅡとし、次の発達段階に当てはまる姿をⅢ、両方とも達成していなければⅠとした。

	評価規準
Ⅲ	防災のために行動している人に感謝し、地域貢献のために、自分ができることを仲間や地域の人を巻き込んだ提案を考え伝えようとしている。
Ⅱ	防災のために行動している人に感謝し、地域貢献のために、自ら行動に移せる具体性のある提案を考え伝えようとしている。
Ⅰ	地域のために行動しようとする意識が薄く、地域の実状に応じて考えようとしていない。

３　実践事例

【探究的な学習の充実に向けての取組】

具体例として、中学校区のゴールである坂中学校第３学年の事例を示す。

＜単元の導入の工夫＞

坂中学校は坂町に唯一の中学校であり、生徒にとって地域は身近である。昨年度、旧第２学年を対象に年度末に行ったアンケート調査では、「他の人や地域の安全のために役立ちたいと考えている」「自分の住んでいる地域で災害が起きたら、ボランティア活動に進んで参加したい」の両項目ともに約93％と高い数値を示している。これまでも、生活科・総合的な学習の時間を中心に、地域について学んできた。加えて、西日本豪雨災害でさらに地域への感謝の気持ちが深まっている。

このことから、導入では、「地域の課題」「自分たちが地域のためにできること」をテーマにWebマッピングで書き出させ、議論させた。その結果、生徒から防災についてもっと深く知りたいという意見を引き出し、生徒にとって必然性のある課題設定となった。

＜外部人材の活用＞

①自衛隊の招聘

6月15日に自衛隊を招聘した。西日本豪雨災害後の復興に向けて活動していただいているため、生徒にとって身近な存在である。生徒が聞きたかったことを事前にお伝えした上で講話をしていただくとともに、救助器具の試作等の体験を中心に学習した。授業後の生徒の感想からは、「自分の命は自分で守らないといけない」「ベッドの下に靴を置くことにします」「困っている人のために、力になりたい」「将来自衛隊に入って困っている人を助けたい」「地域に貢献したい」などが聞かれた。

②坂町地域包括支援センター職員の招聘

西日本豪雨災害があった7月6日に、生徒主体の追悼集会を開催し、外部人材として坂町地域包括支援センターの職員を招聘した。会では、まず生徒がこれまでの学習で自分たちにできることを学級毎にまとめて発表した。坂町地域包括支援センターの職員からは、生徒発表に対する講評と、被災された地域の方々への支援について講話をしていただいた。講評では、「中学生がここまで自分を振り返ったり、地域のために何とかしたいと思ったりしていることに感心した」との言葉をいただき、生徒たちはより前向きに防災について考えるようになった。

③地域の専門家を招いての発表会

10月20日に、防災の地域の専門家である坂町役場環境防災課、坂町地域包括支援センター、地域の防災士の3名を招聘し、生徒が今までの学習のまとめをプレゼンした。特に、これまでの学習を通して、自分に何ができるか考えたことを中心に発表させた。このプレゼンは本単元のまとめでもあり、内容はかなり細部にわたった。地域の専門家からは具体的なアドバイスをいただいた。

＜表現活動の工夫＞

これまでの体験学習を通し、継承していくことの大切さを実感した生徒に、「何か記録としてまとめる方法はないだろうか」と問いかけたところ、「新聞にして残したい」という意見が出た。そこで新聞作成を通し表現していく活動を展開した。新聞の作成にあたり、中国新聞の担当者をゲストティーチャーとして招聘し、記事のつくり方、見出しのたて方等の方法を学んだ。

また、ICTを活用しゲストティーチャーにプレゼンすることを通し、相手意識をもつこと、限られた時間の中でどのようにまとめるか等、話し方や要点の整理等の学習も取り入れた。

【個に応じた指導の充実】

学習を進めるにあたり、個別学習とグループ学習をバランスよく取り入れた。

個別学習では、主にタブレットを活用した。調べ学習や新聞づくりで、それぞれの興味・関心を大切にしつつ、教師から必要に応じて支援した。また、グループ学習では、一人一人が一度は意見を述べることを徹底した。お互いの関わりを促すことで、考えをもちにくい生徒も自分なりの考えをもつことができたと捉える。

４　研究の成果と課題等

（１）成果

成果については、３点挙げられる。

１点目は、中学校区として育てたい資質・能力について整理したことである。小中学校９年間を通して系統的に育成したい資質・能力について整理し全教職員で共有を図ったことで、今後授業づくりの視点が明確になり、日々の教育活動が充実すると考える。

２点目は、生徒にとって必然性のある課題の解決に向かう総合的な学習の時間の授業づくりについて、協議が深まったことである。生活科も含めた授業づくりについて、今年度の取組により、小中学校の教職員で授業研究が進んだと捉える。生徒アンケート結果からも、「課題の解決に向けて、自分で考え、自分から取り組んでいる」の項目に肯定的に回答した生徒の割合が、93％（昨年度の中学校第２学年）→96％（今年度の中学校第３学年）とわずかではあるが増加した。

３点目は、ICTの活用が進んだことである。今年度は、初年度ということもあり、まずはタブレットを使ってみることに力点を置くこととした。生徒アンケート結果では、「学校で、ほぼ毎日パソコンを使っている」の項目に肯定的に回答した生徒の割合が、66％（昨年度の中学校第２学年）→95％（今年度の中学校第３学年）と大きく増加した。

（２）課題

課題については、２点挙げられる。

１点目は、中学校区として系統的に育成を目指す資質・能力に基づいた生活科・総合的な学習の時間のルーブリックと、それに基づいた評価の在り方についての研究である。今年度は試行に留まったが、次年度はさらなる充実が必要と考える。

２点目は、授業のねらいの達成に向けたICTの活用である。今年度はまず使ってみることを重視し、教師も生徒も抵抗がなくなり、日常的なツールとなったが、これもさらなる充実が必要である。

（３）今後の改善方策等

今年度は、研究推進協議会が母体となったプロジェクトチームが主として活動してきたが、今後はさらに校内職員を巻き込んで進めていくことを強化する。